

Comparative Studies on the Jomon Pitfall Hunting Activities in Ishikawa and Kanto Area

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00052767

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



石川県内の縄文時代陥し穴猟

— 関東地方との比較から —

足 立 拓 朗

はじめに

縄文時代における陥し穴遺構の分布は日本列島全体に及び、膨大な数量が検出されている。地域的な特徴を検討するとともに、どのような陥し穴猟が行われていたのかを論じる段階に入っている。そして、具体的な陥し穴の狩猟方法については、畏猟説と追い込み猟説が存在している。畏猟は獲物がかかるのを待つ消極的な方法であるのに比べて、追い込み猟は集団で行う積極的な狩猟方法と想定される。陥し穴猟の性格を畏猟と考えるか、追い込み猟と考えるかによって、縄文時代の狩猟のイメージは大きく異なることとなる。

以前に筆者は関東地方に多く検出される底面に小坑を有

する楕円形あるいは方形タイプの陥し穴を殺傷タイプの陥し穴と分類し、そのような施設のないものを捕獲タイプと考えていた（足立一九九四）。底面の小坑には尖った棒状施設が設置され、陥し穴に落ちた動物を殺傷したと想定していたためである（菊池一九八七）。殺傷タイプの陥し穴では捕獲された動物は出血して絶命する可能性が高く、そのような状態で放置した場合、狼などの肉食獣に獲物を持ち去られてしまうと考えた。そのため、殺傷タイプの陥し穴は、すぐに獲物を回収する追い込み猟、あるいは頻繁に見回りするタイプの積極的な畏猟で使用されたと考えていた（足立一九九四）。

しかし、最近になって小坑に槍状施設でなく単なる逆茂木、あるいは尖っていない棒状施設が設置された可能性が

強く指摘されており（佐藤孝則一九八三、佐藤宏之一九九九・二一六、山本二〇〇三・五四〜七九、中村二〇〇七・一八四）、殺傷タイプという分類そのものを再検討する必要が生じた。本稿では、殺傷タイプと捕獲タイプという分類は保留し、平面形や底部小坑の有無で分類した上で、地理的に大きく隔絶する南関東地方と北陸の石川県の類例とを比較することで、陥し穴猟の地域性とともに、罌猟説と追い込み罌説について考えてみたい。

一 陥し穴研究—罌猟と追い込み罌を中心に—

陥し穴の形態分類については、筆者の分類案（足立一九九二、一九九四）も含めて、数多くの研究があるが（小島一九八三、河村一九八四、三浦一九八八、佐藤一九八九、大泰司二〇〇七、中村二〇〇七、金持二〇一〇二など）、本稿では陥し穴遺構を初めて本格的な研究対象とした今村啓爾の分類案に従う（図1）（一九七三・一四〇）。今村以降に様々な陥し穴研究が積み上げられてきたが、今村の一連の研究が全ての基本となっており（一九七三、一九七六、一九八三）、新しい分類を創出することも大切だが、全

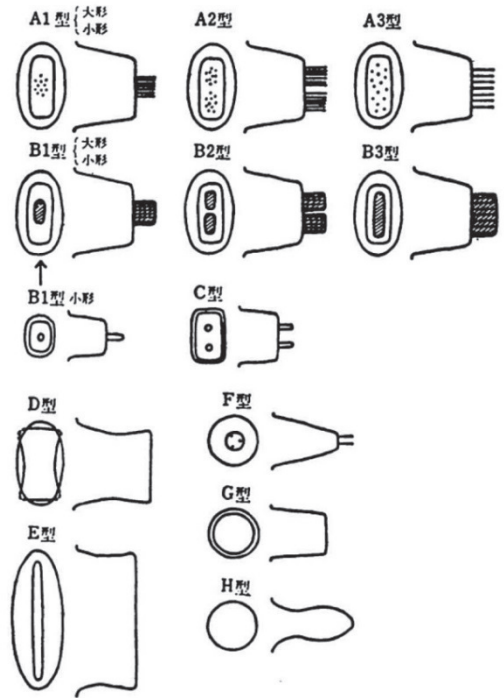


図1 今村啓爾の形態分類（1973）

国的な資料比較を容易にするために陥し穴研究の基本である今村分類を使用して議論することが必要だと考える。

今村は陥し穴研究を開始した直後から罌猟と追い込み罌の可能性を認めている（今村一九七三・一五一、一九八三・一五七）。その後、佐藤宏之は原生民族誌例との比較研究から、陥し穴が罌である可能性が高いことを主張した（一九八九・五三）。また、佐藤は一九九九年にそれまでの陥し穴研究の成果をまとめており（一九九九）、その中で、「陥し穴研究は、全国的な分布の概要もようやく知られるように

なり、その列島の展開過程を視野に入れた地域の畏獣システムへと研究戦略が移行しつつある段階に到達した」と述べ、追い込み獣説をほぼ否定している(一九九二:一一一)。この見解は、その後の陥し穴研究に大きな影響を与えた。

二〇〇三年には、多摩ニュータウン遺跡NO二四三、二四四遺跡が報告された(山本二〇〇三)。この遺跡で検出された陥し穴遺構は、沖積地の保水性の富む土壌に埋没しており、精密な調査により陥し穴に付設された棒状施設の詳細と陥し穴の上部施設である「覆い」が明らかになった。まず、棒状施設については、その尖端は尖っていないこと、竹が使用されていること、斜めに付設されたものがあること、坑底に打ち込んで付設されたものがあること、などが明らかになった。また「覆い」の調査により、「覆い」は陥し穴をカモフラージュしたものと想定されるのに加えて、獲物の逃避行動を強く阻害する機能を有していたと想定されている(長谷古・山本二〇〇三)。これらのことから、多摩ニュータウン遺跡NO二四三、二四四遺跡で検出された陥し穴遺構は、獲物を傷つけず捕獲し、その後も捕らえておくタイプの獣である。そのため、追い込み獣より、畏獣に利用されていた可能性が強いと考えられる。

二〇〇七年には、北日本、関東地方、九州地方の陥し穴

研究がまとめられた(小杉ほか二〇〇七)。その中で、北日本担当の大泰司統は北海道で多く検出されるTピットタイプの陥し穴(E型)については積極的な捕獲の可能性を指摘しているので(大泰司二〇〇七:一八〇)、追い込み獣説に近い見解と言えるかもしれない。中村信博も関東地方における縄文時代中期から後期に盛行する溝型陥し穴(E型)は茨城県において大規模な密接配列が検出されることから、追い込み獣を想定している(中村二〇〇七:一九〇)。しかし、関東地方において早期後半から前期に多い楕円型(A、B型)は二・三基を獣道に配慮する畏獣的な性格の強いものとしている(中村二〇〇七:一九〇)。宮田栄二は九州の陥し穴について、伝統的な組配置から効率的な列配置へと転換したと述べている。そして、陥し穴は雑穀類を守るための害獣対策をかねていた可能性を指摘している(宮田二〇〇七:一九九)。

菅野修広は北海道の陥し穴の季節性を覆土の分析から研究し、秋から初冬、特に晩秋から初冬に多く利用されていることを指摘した(菅野二〇一一:五三三)。また菅野は北海道における陥し穴の対象動物はエゾシカであり、陥し穴は畏獣に用いられたと述べている(二〇一一:四五)。

金持健司は二〇一二年に多摩ニュータウン遺跡群で検出

された一二、三五一基の陥し穴遺構を集成し、その構築時期が早期後半を中心とすること、五八%が同一の形態（C1型・今村分類B1型）を示していることを指摘した（金持二〇二二：六二）。そして、今後の検討事項として、「罨猟と狩猟具の関係精査」を挙げていることから、多摩ニュータウン遺跡群検出の陥し穴罨として「罨猟」を想定していることが伺える（金持二〇二二：六二）。

二 陥し穴の立地・配置・設置

陥し穴がどのような地形（立地）にどのような組み合わせ（配置）で造られたかについては、今村啓爾によつて研究がスタートし（今村一九八三：一三三―一三八）、その後も様々な検討が積み重ねられてきている。

陥し穴は様々な地形に立地しているが、以下の傾向が佐藤宏之により提示されている。まず、関東地方でも発掘調査例の極めて多い多摩ニュータウン内の分析から、底面に小坑を有する楕円形あるいは方形の陥し穴（A、B、C型）は丘陵に立地し、二〜三基を一組にして配置される（佐藤宏之一九八九・四七）。そして、北海道に多いTピットタイプ（E型）の陥し穴は平坦面に列状に配置されることが一

般的である（佐藤宏之一九九二・二一六）。

筆者は立地や配置の分析に加えて、「設置」という概念で陥し穴を分析したことがある（足立一九九四）。

設置とは等高線と陥し穴の長軸方向の関係のことであり、直行・平行・斜行の三パターンが存在する（図2）。

この設置パターンを斜面・台地縁辺・台地平坦面の三立地との組み合わせで陥し穴の分類を行った。等高線と陥し穴長軸方向についての分析は、すでに今村によつて行われているが（今村一九八三：一三五―一三八）、今村の実施した分析は一遺跡（霧が丘遺跡）のみで行われたものである。

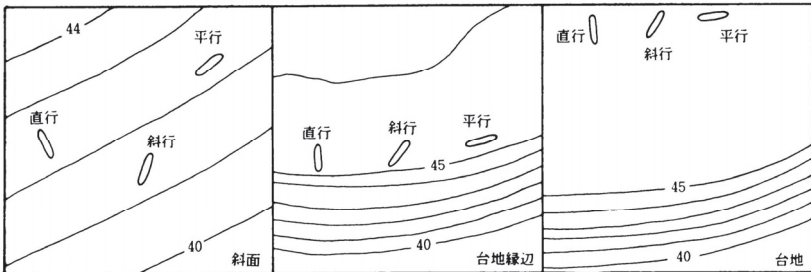


図2 陥し穴の立地と設置（足立 1994）

筆者は関東地方の二五五二基の陥し穴遺構について、立地・配置・設置の分析を行ったところ、以下の結果が得られていた（足立 一九九四）。

一、底部に小坑を有する陥し穴（A、B、C、F型）の多くが斜面に立地し、等高線と平行あるいは斜行に設置される。

二、底部に小坑が無い陥し穴（D、E、G、H型）は斜面・台地・台地縁辺のいずれにも立地し、台地縁辺に立地する時は等高線と直行して設置される。

三、円形陥し穴（F、G、H型）は台地に多く立地する。この中で、円形陥し穴は縄文時代の早期と後期に頻出する形態であり（中村 二〇〇七：二八四）、関東地方の多摩丘陵では二〇七タイプ土坑と呼ばれる（小葉・小島 一九九四）。筆者の行った分析でも円形の陥し穴は中・後期の土器片を覆土に含むことがあり、また中期の住居跡を切っている類例が認められるため、中期以降に属すると考えていた（足立 一九九四：二五八）。

この円形タイプの陥し穴（F、G、H型）は関東地方では少ないことが知られている。筆者が千葉県で行った分析でも図3右のような割合を示し（足立 一九九二）、方形（A・D型）や溝形（E型）に比べ極端に少ないことを示して

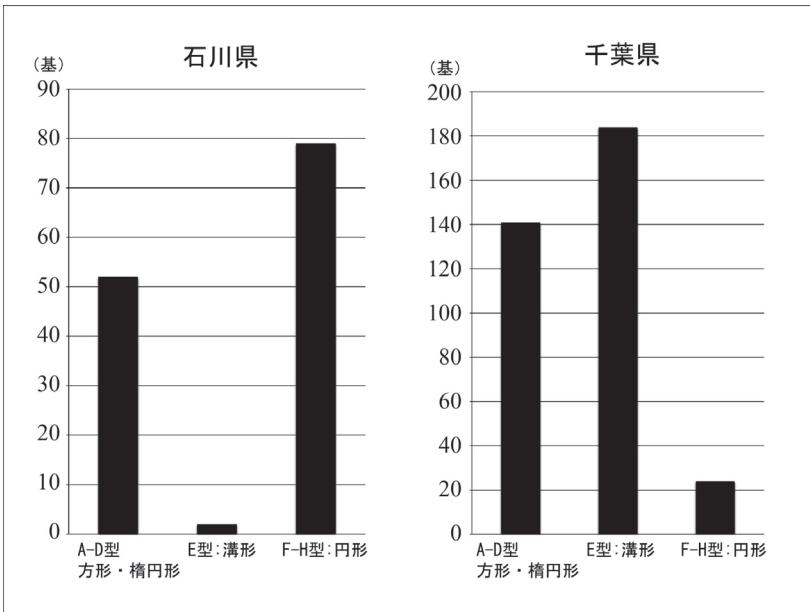


図3 石川県と千葉県の陥し穴形態（足立 1992 に追加）

いる。しかし、この円形タイプは石川県では比較的多く検出されるタイプである。次節では石川県の陥し穴について現段階での集成状況を述べ、千葉県との比較を試みたい。

三 石川県内の陥し穴

石川県では、一九八四年に羽咋町柳田シヤコデ遺跡で四八基の陥し穴遺構がまとまって確認された(図4・11、4)(河村一九八四)。また同年に同じく羽咋市の気多社僧坊跡群寺家オオバタケ地区からも陥し穴遺構が検出されている(湯尻一九八四)²⁾。

その後、一九八六年には輪島市三井小泉遺跡で一基(E型)が調査されている(図4・11)(越坂一九八六)。また、津幡町の竹橋油木谷遺跡一七基、谷内石山遺跡で二基が検出されており、他にも志賀町では中村畑遺跡、代田宮田遺跡、宝達志水町(旧押水町)では免田一本松遺跡と宿東山遺跡で陥し穴が確認されている(西野一九八八・四、五)。

宿東山遺跡では二一基の土抗が検出され、いずれも縄文時代の土抗と推測されている。古墳時代の住居跡に切られているものが一基あり、五基の陥し穴遺構から縄文土器が

出土しているが、いずれも細片であるため、時期は不明である(北野一九八七)。本稿ではこれらを陥し穴遺構として集成した。

金沢市の前田氏(長種系)屋敷跡では中期あるいは後期の陥し穴遺構一基(E型)が検出されている(伊藤・安中二〇〇二・三、二一)³⁾。

能美丘陵(能美市(旧辰口町))では以下のように確認されている。大口小松原遺跡では七基が検出され(図4・5、6)(F型五基、G型二基)、中期古府式前後に年代づけられている(三谷・西野一九九七・八六)。長滝長尾遺跡では、二基(F型一基、G型一基)確認されている(三谷・西野一九九七・二一六、二一七)。宮竹庄が屋敷C遺跡北地区では五基(F型四基、B小型二基)が確認され、中期初頭新保式の土器片が出土している(橋場ほか一九九九・二二九、二四二)。同遺跡中央区では四基(F型一基、G型二基、H型一基)(図4・9、10)、南区では一基(G型)が確認されている(橋場ほか一九九九)。宮竹あつ坂遺跡では二基(F型)が検出されている(図4・7、8)(西野一九九九・一一七)。能美丘陵では他にも宮竹うつしよやまA遺跡でも確認されている(西野一九九九・五二九、五三三)。小松市では八里向山F遺跡から一基(F型)が検出され

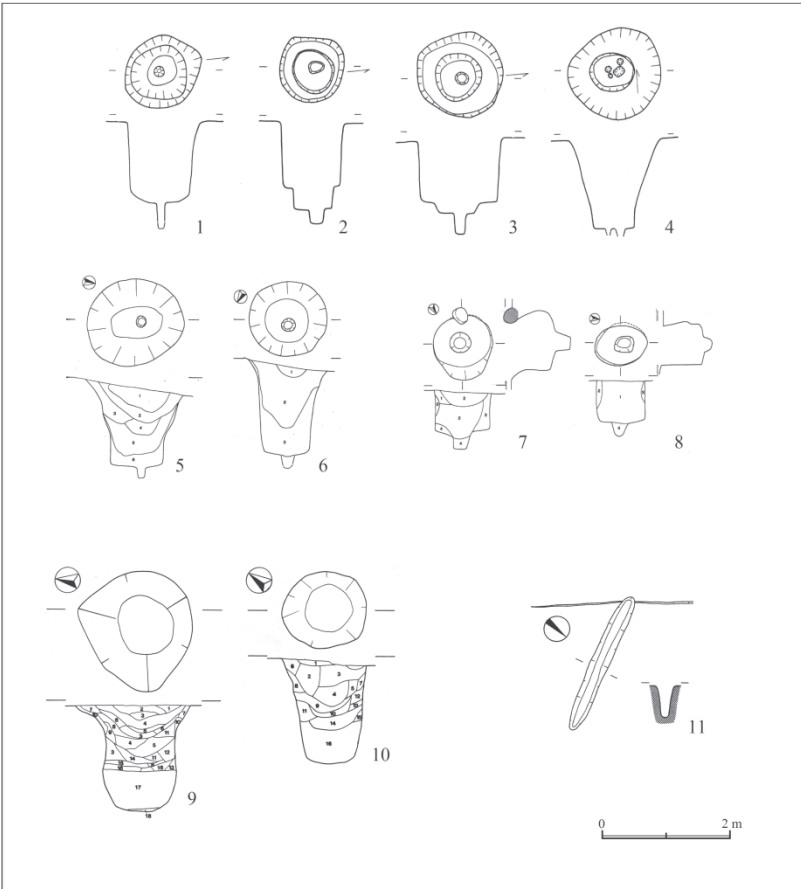


図4 石川県の陥し穴形遺構 (1-8 : F型 ; 9 : H型 ; 10 : G型 ; 11 : E型) (1-4 : 柳田シャコデ遺跡 : 河村 1984 : 図 6-25, 26, 28, 29 ; 5, 6 : 大口小松原遺跡 : 三谷・西野 1997 : 図 72-SK4, 5 ; 7, 8 : 宮竹あつ坂遺跡 : 西野 1999 : 図 104-SK20, 21 ; 9, 10 : 宮竹庄が屋敷C中央遺跡 : 橋場ほか 1999 : 第 186 図-SK147, 144 ; 11 : 三井小泉遺跡 : 越坂 1986 : 第 20 図)

表1 石川県の陥し穴形態分類（三浦 1988 に追加）

遺跡	A型	B型	B小型	C型	D型	E型	F型	G型	H型	合計
三井小泉						1				1
中村畑					4		6	7		17
柳田シャコデ	1		16	3	4		15	9		48
寺家オオバタケ地区								4		4
宿東山	3		11		4		2	1		21
谷内石山					2					2
竹橋油木谷	2				1		13	1		17
前田氏（長種系）屋敷跡						1				1
大口小松原							5	2		7
長滝長尾							1	1		2
宮竹庄が屋敷北			1				4			5
宮竹庄が屋敷C中央							1	2	1	4
宮竹庄が屋敷C南								1		1
宮竹あつ坂							2			2
八里向山F							1			1
合計	6	0	28	3	15	2	50	28	1	133

ている。覆土は埋め戻しの痕跡が観察されている（望月ほか二〇〇四：九五）。

石川県内の縄文時代陥し穴について、三浦純夫は縄文時代の大型土坑として検討している（三浦一九八八）。この三浦の研究は弥生時代の大型土坑の研究が主目的であり、縄文時代については副次的な研究であるが、石川県の縄文時代陥し穴研究として、基礎的な研究と位置づけられる。

三浦は分析した土坑が実際に陥し穴（落とし穴）であるかは慎重な検討が必要であるとしながら、これらを形態・底部施設により分類している。この三浦の形態分類では円形あるいは楕円形の陥し穴を最も多い形態として位置づけており、円形陥し穴遺構が石川県の特徴であることを指摘していると言える。

この三浦の業績に本稿集成の類例を加えて、今村分類で再整理したのが表一である。そして、A、B、C型（方形・楕円形）、B小型（正方形）、F、G、H型（円形）、E型（溝形）で数量をグラフ化した（図3左）。

筆者は千葉県でも同様な形態別の陥し穴遺構集成（三四九基）を実施したことがある（足立一九九二）。両地域の形態差の傾向の違いを比較してみたい。ただ、両者の母数には大きな隔たりがあり、石川県は千葉県に比べると陥し

穴遺構の検出例が少ないということを念頭におかなければならない。

形態別の数量を石川県と関東地方の千葉県で比較すると、以下のことが明らかとなった(図3)。

一、石川県では円形(F、G、H類)の陥し穴遺構の割合が多い。

二、溝形(E型)の陥し穴遺構の検出例が石川県には非常に少ない。

E型は北海道ではTピットと呼ばれているタイプであり、シカ用の陥し穴と想定されることが多い(佐藤孝則 一九八六など)。このタイプは石川県内では今のところ二基しか検出例を集成できていない。石川県内の陥し穴遺構の集成作業は完全とは言いつれない状態であるが、この形態が非常に少ないことが明らかになった。逆に関東地方や北日本では比較的少ない円形タイプの陥し穴が石川県では一般的である。

これらのことから、石川県では縄文時代に千葉県とは異なる陥し穴の狩猟方法が用いられた可能性が指摘できよう。ただ、一部の研究者によって追い込み猟が想定されている溝形の陥し穴(E型)は石川県には非常に少なく、群をなして検出されてはいないので、追い込み猟が実施されてい

たとは考えられない。

以上のことから、佐藤宏之によって想定されているように(一九八九、一九九九、二〇〇七)、石川県でも罾猟を基調する陥し穴罾が行われていたと考えられる。しかし、使用した陥し穴の形態には差違が見られることから、異なる技術体系を有する罾猟が開された可能性が考えられる。今後はどのような罾猟技術が存在したかを解明することを念頭に置きながら、集成を進めていく必要がある。

また、本稿では千葉県との比較から石川県の陥し穴遺構に円形(F、G、H型)が多く、溝形(E型)が極めて少ないことを指摘したが、これが北陸全体の特徴と言えるかどうかを検証しながら、集成を進めていくことが陥し穴遺構の地域性を考察していく上で肝要と思われる。

本論考は二〇一四年一月二三日に行った北陸史学会での発表配付資料に追加して作成した。

注

(1) 今村以前にも、宮坂英弼・宮坂虎次・藤森栄一によって同様の遺構が陥し穴であることが指摘されている(藤森 一九六六、宮坂・宮坂 一九六六)。

(2) 湯尻修平は本遺跡で検出した土坑が陥し穴である可能性は認めつつも断定はしていない。本稿では報告者がC類として分類したもののみを陥し穴遺構として集成に加えた(湯尻一九八四・七〇一八)。

(3) 本遺跡は大手町遺跡の名称で紹介されている。そこでは後期の陥し穴が多数検出されていると述べられている(庄田二〇〇六・二一)。

引用・参考文献

- 足立拓朗 一九九二「千葉県内における縄文時代の落とし穴について」『青山考古』一〇号 青山考古学会 一〇一―一二頁。
- 足立拓朗 一九九四「縄文時代の落とし穴の立地・設置・配置について」富永樹之・足立拓朗・菅野和郎編『千葉県山武郡山武町森台遺跡の調査Ⅱ』青山学院大学森台遺跡調査団 一四三―一六七頁。
- 伊藤雅文・安中哲徳(編) 二〇〇二『金沢市前田氏(長種系)屋敷跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター。
- 今村啓爾 一九七三「霧が丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧が丘』霧が丘調査団 一三二―一五九頁。
- 今村啓爾 一九七六「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』二七号 物質文化研究会 一〇一―一二頁。

今村啓爾 一九八三「陥穴(おとしあな)」『縄文文化の研究2 生業』雄山閣 一四八―一六〇頁。

大泰司統 二〇〇七「北日本の陥し穴猟」小杉康・谷口康浩・西

田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学5 な

りわい―食糧生産の技術―』同成社 一七一―一八二頁。

金持健司 一九九七「多摩ニュータウン遺跡群における陥し穴土

坑の形態別出現率」倉田芳郎先生古稀記念会編『生産の考古

学』倉田芳郎先生古稀記念会 同成社 一五―二二頁。

金持健司 二〇〇四「多摩ニュータウン遺跡群における早期後半

の遺構と遺物」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XIX。

金持健司 二〇一二「陥し穴」『東京都埋蔵文化財センター研究論

集』東京を掘る…東京都埋蔵文化財センター三〇年の軌跡

東京都埋蔵文化財センター 六〇―六二頁。

河村好光 一九八四『羽咋市柳田シヤコデ遺跡 能登海浜道関係

埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』石川県立埋蔵文化財センター。

河村好光 二〇〇〇「加賀・能登の誕生」『石川県の歴史』山川出

版社 九―四五頁。

菅野修広 二〇一一「陥し穴の季節性」『駒澤考古』三六号 駒澤

大学考古学研究室 四五―五五頁。

菊池 実 一九八七「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」

『研究紀要』4号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

一五〇二八頁。

調査報告三三三号 八三〇一〇八頁。

北野博司(編) 一九八七『宿東山遺跡 一般国道一五九号押水

バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県

立埋蔵文化財センター。

小栗一夫・小島正裕 一九九四「仮称二〇七タイプ」土坑につ

いて『東京考古』二二号 東京考古学会 六〇〇六二頁。

小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一(編) 二

〇〇七『縄文時代の考古学5 なりわい―食糧生産の技術―』

同成社。

越坂一也(編) 一九八六『三井小泉遺跡』石川県埋蔵文化財セ

ンター。

小島正裕(編) 一九八三『多摩ニュータウン遺跡―昭和五七年

度―(第5分冊)』東京都埋蔵文化財センター。

佐藤孝則 一九八六「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北

海道考古学』二二輯 北海道考古学会 一〇七―一二二頁。

佐藤宏之 一九八九「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と

民族誌』六興出版 三七―五九頁。

佐藤宏之 一九九九「遺構研究 陥し穴」『縄文時代』一〇号 縄

文時代文化研究会 二二―二二〇頁。

佐藤宏之 二〇〇二「日本列島旧石器時代の陥し穴猟」佐々木史

郎編『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』国立民族博物館

佐藤宏之 二〇〇七「縄文時代の狩猟・漁撈技術」小杉康・谷口

康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古

学5 なりわい―食糧生産の技術―』同成社 三―一六頁。

庄田知充 二〇〇六「金沢市広坂遺跡の発掘調査―中世編―」『金

大考古』五四号 金沢大学考古学研究室 二二―二九頁。

中村信博 二〇〇七「関東地方の陥し穴猟」小杉康・谷口康浩・

西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学5 な

りわい―食糧生産の技術―』同成社 一八三―一九二頁。

西野秀和 一九八八「津幡町刈安野々宮遺跡」国道8号線改築事

業に係る石川県河北郡津幡町刈安野々宮遺跡緊急発掘報告

石川県埋蔵文化財センター。

西野秀和(編) 一九九九『能美丘陵東遺跡群V』いしかわサイ

エンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財調査報告所 石川県

埋蔵文化財センター。

橋場和彦・亀田文哉・三谷正輝・立原秀明・布尾幸恵・布尾和史

(編) 一九九九『能美丘陵東遺跡群IV』いしかわサイエン

スパーク整備事業に係る埋蔵文化財調査報告所 石川県埋蔵

文化財センター。

長谷古真也・山本孝司 二〇〇三「土抗」山本孝司(編) 二〇

〇三『多摩ニュータウン遺跡―NO二四三、二四四遺跡―(旧

- 石器・縄文時代』東京都埋蔵文化財センター 五四～七九頁。
藤森栄一 一九九九『古道』講談社(原本一九六六年学生社刊)。
三浦純夫 一九八八「大型土坑の機能について―能登半島の弥生時代を中心として―」越坂一也(編)『竹生野遺跡』石川県埋蔵文化財センター 一九三～二一六頁。
三谷正輝・西野秀和(編) 一九九七『能美丘陵東遺跡群Ⅱ』いわさひサイエンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財調査報告所 石川県埋蔵文化財センター。
宮坂英弼・宮坂虎次 一九六六「城之平堅穴群遺構遺跡」『蓼科』別編 尖石考古博物館研究室。
宮田栄二 二〇〇七「九州地方の陥し穴痕」小杉康・谷口康浩・西田康民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学5 なりわい―食糧生産の技術―』同成社 一九二～二〇〇頁。
望月精司・津田隆志・川畑謙二・宮田 明・下濱貴子・林 大智(編) 二〇〇四『八里向山遺跡群』八里台住宅団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県小松市教育委員会。
山本孝司(編) 二〇〇三『多摩ニュータウン遺跡―NO二四三、二四四遺跡―(旧石器・縄文時代)』東京都埋蔵文化財センター。
湯尻修平(編) 一九八四『羽咋市気多社僧坊群 能登海浜道開係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』石川県埋蔵文化財センター。